

家に帰りましたら、母は既に昭和十九年に死んでしまっていて、驚いたり悲しんだりしたのですが、子供は大きくなっていました。

私は、入営前から軍需工場に籍があり、青年学校で体育係をしていました。三年勤務をして、昭和二十五年に退職をし、農業をしていました。三十三年から四年間は、新聞販売の店長をしました。

家は農家でもありましたから地元の神社総代をしたり、農協理事を二期勤めたりもしました。長男も大きくなり、家業を継いでくれましたし、次男も自立し生活をしているので、もう安心して生活をするのができ、幸せであります。

戦時中、私は満州で、丸四年以上、軍人で過ごしていたし、終戦後の満州の状況も不明でありましたから、家では死んでしまったのかと、諦めていたようでした。

私も戦後、シベリアへの抑留等でもあれば生きて帰れなかったかもしれませぬ。

私は幸いにして、子供たちも、先祖の家業である農業も継いでくれたり、自立して生きてくれ、孫は六人、曾孫二人で安心して生活しています。地域の世話役もし、更に我々仲間の恩給欠格者救済運動も二十年やっていて、我が人生を全うしようと思っています。

ダモイ 青春

滋賀県 国松 清

私は、大正十三（一九二四）年滋賀県栗太郡葉山町に生まれました。昭和十九（一九四四）年四月、県立瀬田工業学校を卒業しました。

その昭和十九年四月から、新しく特別幹部候補生という制度ができて、その第一期生として航空隊に志願しました。そして兵庫加古川の陸軍航空通信学校に入學、一年間、そこで通信の教育を受けました。滋賀県出身のものは六人ほどおりました。その一人の東森栄三君は、守山市の郵便局の近くにいました。そ

の東森君も復員してきて駅前で働いており、昭和四十年に一度だけ会っただけで、その後は会っておりませんが、軍隊では同じ中隊におりました。

とにかく終戦一年前にできた特別幹部候補生には、通信、航空、海軍と三つの兵科がありまして、私は半年間、加古川で基礎教育を受け、後半年で通信の教育を受けました。

通信というものは、とにかく回を重ねないと自動的に頭からでてきません。無線通信でございますので、「一、二、三、……、十」と電鍵を打つことばかりです。「一は一の数字」「五は五の数字」ボタンを押すのは決まっております。また「アイウエオ、カキクケコ」の五十音もすべて覚えなくてはならない、ということ、本当に通信を覚えるには寝ても覚めても、便所の中でも繰り返し復習し、覚ええます。そして文章の打ち方の徹底的な教育を受けました。

そして昭和二十年四月に彦根の航空通信学校を卒業しました。そこでは第一中隊、第二中隊、第三中隊と

ありまして、第一中隊が二百人ほど、我々の第三中隊も二百人位おりまして、計六百人の卒業生ができて、各航空部隊に配属されたということでございます。

その転属命令で一番早かったのは、内地への転属組でした。四月早々から毎日のように午後二時になりましてと部隊の前で「命令授与」のラッパが鳴ります。この「命令授与」のラッパは日によつては四時半か五時頃に鳴る時もありましたが、この「命令授与」のラッパが鳴りますと、各中隊の准尉さんが命令授与に行かれます。そして約一時間ほどすると、命令授与から帰ってこられて、「誰誰、何人は、直ちに事務局へ出て来い」というようなことで、そこで小隊長共々命令されるのです。しかし、行く先は決して発表されませんでした。「何時に部隊本部の前に整列せよ。転属や」と言うだけで、決して行く先は発表はされませんでした。そして内地勤務の者は約三分の一でしたが、四、五日の間に転属のため出て行かれました。

そして私らは、四月の末に命令がออกมาして、四時頃

に部隊本部の前に整列致しました。そしたら「出発時間、今夜の九時」で、それまでについてでも出られるように出勤準備をせよ、と言うことでして、八時頃までに出発準備を完了致しました。

行く先は絶対教えてくれませんので、東を向いて行くのだろうか、西を向いて行くのだろうかとお互いに推測しつつ、多分我々は内地ではないらしいという想像をいたしておりました。そして九時に列車に乗ることになりました。列車の両側の窓は全部網戸を降ろされ、外を見ることができず、列車は西へ西へと進んで行った訳です。そして到着したのは博多でした。

我々満州へ転属するものの中には九州の者もおりましたし、加古川からきた戦友もおりました。博多の駅で一時間ばかり休憩致しましたら、乗船することになりました。博多を出港したのは、昭和二十年五月九日の十二時頃になっていました。港を出てしばらくすると、そこは玄界灘、船に余り乗ったことのない我々は一時間ほどしたら食べ物全部出してしまします。それほど玄界灘というところは波の高いところです。苦

しんで苦しんでほとんどの人が猛烈な船酔いを致しました。そして翌朝、ここは釜山の港らしい、と聞きました。

そして釜山に上陸して、長い長い朝鮮を通り満州へ入り、五月十九日、ハルピンに到着。さらに満州里から少し行った満州の北部では最も大きな町チチハルの近くで、新しくできた部隊に配属されることになりました。満州第一六八六部隊でした。そこでは約半月ほどおりまして、それからさらに国境方面の任務に就いた訳です。

内地でなかったのは、無線ばかりでございましたが、その時、初めてブラウン管を見ました。そのブラウン管は、よく調べて見ますと、日立製作所製のブラウン管で、画面の対角は二〇センチありました。そしてそのブラウン管の長さは八〇―一〇〇センチありました。

「何と新しい兵器ができたものだなア」と驚きました。この兵器は最新式の兵器だということで、内地の

教育隊では、この種兵器については余り教えてもらわなかったのですが、内地から教官が四、五人来て、このブラウン管の見方、使用方法を教えてくださいました。ブラウン管は、先程記したような大きな画面ですが、その画面の真ん中に横線が一本入っている。その映像の流れで、上空何百メートルの高さで飛行機がこちら（満州）の領土へ入ってくるかと、それを見分ける機械です。

それで送信機が約一〇キロ離れた所に設置してあって、その送信機から電波を放射しますと、その電波が敵の飛行機に当たりまして反射して帰ってくる。その電波を受信装置のブラウン管が受けて「敵の飛行機がきた」と分かります。そのような勤務を二十四時間交代で行うのが我々航空隊に課せられた任務でした。

部屋はトーチカ風になっていまして、そのトーチカの上部のコンクリートの厚さは八〇―一〇〇センチぐらいの厚みがあります。前方は一〇センチ幅で一メートル長さの窓が二つついている。そして後には休憩所もあり、炊事場もあり、炊事当番が二人ほどおりまし

た。一つの監視哨には、場合によっては十人位の時もありますけれども、大体八人位で、交代で勤務するというようなことでありました。そんなことで、我々は敵の飛行機の侵入を二十四時間体制で監視する業務をしていた訳です。

ところが皆さんもご承知の通り、昭和二十年八月六日に、日本が見たこともないというような大きな爆弾が広島に投下されました。その時も我々第一戦の監視隊も、何か知らんがおかしな情報が若干入ってくるというところで、他の監視哨とも連絡して「日本の国の広島に、とても大きな爆弾が落とされたらしい」というニュースを一日遅れて、我々も聞きました。そして八月九日に、今度は長崎にもアメリカは原子爆弾を投下しております。

そのような時のある日朝、東の空が少し明るくなった時に、監視していましたがブラウン管を見ました当直の勤務兵が「えらいこっちゃ」といいます。丸いブラウン管の真ん中に横線がありますが、その左の方から

電波が映るようになった訳です。直ちに上官や戦友を起こして、そのブラウン管を見たら、今まで、そのように現われたことのないような現象がブラウン管の表示として出ており、時間が経つに連れて、その電波の振幅数がだんだん上へあがって来ました。「大変なことっちゃ」「えらいことっちゃ」と直ちに部隊本部へ連絡するやら、有線や無線でその現象を監視哨とも連絡し合つて調べたところ、どこの監視哨でも、ソ連領から敵の飛行機が飛んできている、と知らされました。

そして朝がぼんやり明けた時に、ソ満国境を越えて敵の偵察機が一機侵入してきました。そして部隊（本土）の方から、本土決戦が近づいてきているという情報も入ってきていましたし、沖繩も玉砕となり、いよいよ日本本土に向けてアメリカ軍が上陸するであろうというところで、一層監視を厳重にし、もし何か起きたら、どんな小さいことも全部、部隊の方へ報告せよ、と命令を受けておりましたのですが、八月十二日、にわかにな「撤収せよ」ということになり、そして十五日の終戦となった訳です。

撤収のために、八月九日から一週間というものは一睡もせず、食べるものは乾パンだけで、米の飯というものは食べたことがなかったのです。そしてすべての兵器は直ちに貨車に積んで、その貨車も無蓋貨車で、チチハルの部隊へ全部持つて帰つてこい、というものでありました。現在なら自動車もあり便利なのですが、当時はソ満国境からチチハルまで、十二、三人の間で運ぶのです。大きな発電機、これも現在のガソリン・エンジンなら三五〜四〇キロ程度ですが、その当時は全部ディーゼル・エンジンで、相当重いものでした。また、三人ぐらいで掛らないと動かない大きな整流器や、いろいろの機器、資材など最近の電子機器とは比べものもない重い重い機器をいっぱい無蓋貨車に積んでチチハルに帰つて参りました。

本当に八月九日からは、部隊の命令によつて器材を運び、そして、そのあと十五日の日本の敗戦、終戦、さらに十六日になると大変な問題が次から次へと起きて参りました。

第一は満軍です。いわゆる日本の指導によつて満州

には満州の軍隊がありました。それには開拓団の方
もたくさん行っていました。一方、日本の軍隊が満
州に一番多く勤務していた時は関東軍として五〇万と
いわれて、それは昭和十八年の頃であつたと思いま
す。だんだん減りましたが、終戦の頃には、当時の関
東軍の兵力の三分の二くらいは南方や他の地域へ移動
していたと私は思っております。そしてその満軍が
戦争が終つて八月十七日頃になると、日本軍隊のいる
方に向けて、そして兵舎に向かつて、機関銃を撃ちま
くりました。

戦争というものは、こんなものかな、今までは満軍
は、日本の軍隊の下で訓練をしておりましたけれど
も、日本が戦争に負けたというのと、二日後には、すぐ
さま満軍の兵隊が日本軍の兵舎、満鉄の官舎、営外の
住居を目がけて機関銃を撃ちまくりました。それから
四日か五日間、毎晩、機関銃や小銃を持って、日本軍
の官舎などに略奪にも来ました。

そんなことで、八月末いっぱいまで日本へ帰れるかな

と思つていた訳ですが、十月一日に、満州里を越えて
チタ州のペテロスクの第八収容所に入った訳です。そ
れからソ連の労働者として働きました。幸いにして、
私の行った収容所の近くには人口、当時三万人位の町
があつて、その町の復興作業をするのが主な仕事であ
りました。時と場合によつては、貨車の石炭降ろしに
も行かねばならぬし、また食料の運送の手伝いもしな
ければならぬし、秋になれば大きなコルホーズ農場の
ジャガイモ掘り、キャベツの収穫等々の、ソ連の住民
の方と一緒に働いて過ごしました。

ソ連の冬の時期は、零下四五度となりますと、一斉
にサイレンがなります。そうすると、屋外作業は一
切、捕虜である我々もソ連の労働者も、その日は休み
です。そして毎日、朝八時三十分頃になりますと、サ
イレンが鳴つてくれるといひがなと考えます。休みに
なると、我々は収容所に帰つて、いわゆる内務班に
帰つて、ゆつくりできる訳です。零下四五度になる
と、外に立つていて靴を履いていても、靴の中で指を

動かしていなければ凍傷に罹ります。

零下四五度以上の寒さの中では、防寒靴、頭巾を被っていても、吐く息で周りが真っ白になります。靴の中で足指を動かして、しばらくぼやぼやしていると鼻がしらが白くなって来ます。「オイ、お前の鼻がしらが白くなって来たぞ、もまなあかん」と。そんなことをしておりまして、シベリアの冬は凍傷に罹る訳です。

そしてシベリアの地に入りますと、十月には、朝起きると氷が張っております。そして一〜四月いっぱい自動車は川の上を走っています。川の水が全部凍ってしまつて、その氷の厚さが五〇〜八〇センチもあります。

内地への帰還は、昭和二十二年六月十二日、ナホトカ出發、「栄緑丸」に乗船、六月十九日に帰宅しました。戦争というものは、人生というものを一八〇度回転させ、悲劇を運んできます。時には、その人生をご破算にするものです。

戦争になると、日本の国は、今度こそは原爆の一つや二つですまんかも分らんような大きな兵器もミサイルも世界の国はたくさん持っております。日本には一個もありません。戦争はあくまでも抑止し、日本の景気の現状をお互いなんとか苦痛を我慢して、次の世代が平和であることを祈っています。

永遠の平和を願ひ

滋賀県 平野 喜三

私は、大正九（一九二〇）年十一月十九日生まれです。昭和十六（一九四一）年一月、関東軍第十二特殊無線隊に入隊しました。幹部候補生を経て、特殊任務としてソ連電波の傍受、暗号解読、無線電波による方向探知などに従事しました。昭和十八年三月、関東軍固定通信司令部付、さらに昭和二十年八月一日、関東軍司令部付となり終戦を迎えました。

そして十月ソ連に抑留となり、ハバロフスク収容所